

中国語教育学会会報

第7号(通巻32号) 2003年9月16日発行

下記事務局へのご連絡は郵便で

中国語教育学会

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部中文研究室内

郵便振替口座 00110-1-191152

03年度後半の月例会開催ご案内(1面)

学会誌第2号投稿規定と執筆要領を公表(4面)

今年度第3回に当たる6月例会から、会員の勤務校に持ち回りで会場の提供と運営をお願いし、かつ中国語教育の現場から問題を取り上げて、月例会を開催することとした。9月は都合により休会のやむなきに至ったが、10月以降について、以下にご案内を掲げる。今後も各

会員に一層の関心と協力を求めたい。

学会誌は前号で予告した通り、第2号を来春刊行する。創刊号の経験をふまえた投稿規定と執筆要領が今号に掲載されているので、奮って玉稿をお寄せいただきたい。創刊号に倍増するページ数を確保し、将来は年2回刊行としたい。

中国語教育学会2003年10月～12月例会のご案内

10月例会 日時: 10月11日(土)14時～ [参加費不要・事前申し込み不要]

会場: 明治学院大学白金校舎 3号館3203教室

(正門を入り、まっすぐ進み、左側の円形の建物です)

※交通 都営地下鉄三田線、営団地下鉄南北線白金台駅または都営地下鉄浅草線高輪台駅からそれぞれ徒歩約7分。JR品川駅高輪口から目黒駅行都バス、または目黒駅東口から大井競馬場行都バスで、それぞれ明治学院前下車。

人と題: 陳文正(日本大学芸術学部)《法英汉语課听课记录》

今春、報告者がヨーロッパの大学を回って見聞された中国語授業の様態をご自身の撮影による映像を使ってお話しいただきます。

※10月例会については、すでに葉書で各会員にご案内した内容と同じです。

11月例会 日時: 11月8日(土)14時～ [参加費不要・事前申し込み不要]

会場: 大東文化大学板橋校舎 2号館0219会議室

※交通 都営地下鉄三田線西台駅から徒歩約10分、または東武東上線東武練馬駅脇の大東文化会館から学バス利用。

人と題: 呂紅梅(大東文化大学)「“一些个学生”について」

高靖(大東文化大学)「文法的なカテゴリーとしてのヤリモライー—中国語との対照を考えて—」

12月例会 日時: 12月13日(土)14時～ [参加費不要・事前申し込み不要]

三宅登之(東京外国語大学)会員に報告をお願いしてありますが、会場は未定です。

11月中旬にあらためてご案内いたしますので、ご予約にお加えください。

中国語教育学会 6月、7月例会 記録

以下に、6月例会(6月14日、青山学院大学)と7月例会(7月12日、文教大学)における報告概要を、事務局(幹事:島田亜実)で整理の上、掲載する(文責:学会事務局、敬称略)。

6月例会 報告者:遠藤光暁、車麗。報告のほかに、参加者によるディスカッション。

遠藤光暁:中国語の強さアクセントの音声的・文法的性質と諸教科書・辞書類における扱い

1. 中国語の強さアクセント 2. 単語アクセントの強さの段階の種類 3. 文アクセントの音声的・文法的性質 4. 諸教科書・辞書類における強さアクセントの扱い

常日頃おろそかにされがちな中国語の強さアクセントの音声的・文法的特質を挙げ、また諸教科書・辞書類では強さアクセントがどう扱われているか、という報告であった。実際、軽音(軽声とは異なり、軽く短く発音されるが固有の声調を保っているもの:“只是”、“小姐”など)や、声調交替(xuéshēngとdàxuéshēngなど)、また文アクセントは、授業時には一言注意する程度(または説明なし)で、教えずらくもあり、教えている当人がネイティブでない場合は自分でもどこまで正しく発音できているか危ういところである。強さアクセントに注意した教科書もいくつか出版されているが、これらの知識をこれからどのように生かしていくべきか、まだよい解決法がないようだ。[報告者執筆の参考資料:月刊誌『中国語』98年8月号所載「中国語のエッセンス」、同03年3月号所載「強さアクセントとイントネーション」]

車麗:日本人の中国語発音傾向に関する調査

I. 有気音を無気音化する傾向について II. zh, ch, shを舌面音化する傾向について
III. 舌葉音化する傾向について IV. 中国語の[z]を日本語の[r]に代用する傾向について
V. 中国語の[f]と[x]を日本語の[ɸ]で代用する傾向について

日本人学生はどんな声母・韻母の発音がよくできるのか、どんな発音が困難なのか、という点を調べるため、第二外国語の学生に、単音節および複音節からなる合計64語の発音課題リストを発音させ、その結果(四声は考慮せず、子音と母音のみを調査対象とする)をまとめた。一例として、[p'ɔ]を正しく発音できた学生は3割程度だが、[p'ɔ]と発音している学生が半数程度いることから、子音だけで見れば8割が正しい、というように、子音・母音を分けて結果が示され、日本人学生にとって発音の困難なポイントがわかりやすく指摘された。参加者からは、今後さらに発音課題リストに加えたい音節の組み合わせや、調査対象・調査方法に関する問題点などに関し多くの意見が出て、活発な討議も行われた。

ディスカッション:CALL教室の有効的な利用方法について、会場校の青山学院大学における問題点が紹介され、参加者の所属校における現状や、さらには利用上の工夫などが紹介された。学校ごとの状況に差があることがわかり、CALL教室に限らず、PC教室やLL教室の利用についても、もっぱら自習やビデオ教材の利用などに限定された使い方に留まるケースが少なからず、どちらかという、多くは持て余している状況という印象であった。いまのところ、利用したくても対応する有効な教材やプログラムなども少ないようで、人や教材を機器に合わせて行く状況だが、システムの方をもっと語学教育に有効に使えるように改良することも必要と感じた。

7月例会 報告者：山田忠司、野間晃、白井啓介。

山田忠司：中国語教育に関する若干の私見

1. 子音導入時の母音について 2. コーラスvs個別 3. テープvs肉声

中国語の発音教育についての、いくつかの私案が提出された。例えば、子音導入時に子音と組み合わせる母音は、発音の困難な子音と同じく発音の困難な母音の組み合わせで苦しむことを避けるため、従来のbo、po、mo、fo/de、te、ne、le…といった中国の習慣に基づくものではなく、一律に-uを使うのはどうか。日本人には難しいとされる捲舌音の習得には有効であろう。また、声調練習の際に、コーラス練習と個別発音矯正のいずれが有効であるか、議論のあるところで、個別矯正時に聞かされる他人の間違った発音が悪い影響を与えるともいうが、個別矯正はダイレクトに自分の間違いを認識できるのではないか。他人の発音が矯正される場面を目の当たりにすることも有効であろう。さらに、肉声で発音の模範を示すことが第一とは思いますが、ネイティブスピーカーでない限り、学生に指導者以上の発音が望めないとすれば、テープなどの録音教材の利用も考えたい。

以上の諸点について問題提起があり、参加者と意見の交換が行われた。

野間晃：高等学校における中国語教育の実践について

1. 高等学校における中国語教育の問題点 2. 発音教育における重要事項

高校での中国語授業について、(1)授業時間・回数、(2)クラス編成、(3)生徒の学習能力、(4)教材、(5)効果的な教育方法について、など紹介があり、あまりやる気のない生徒にも、ページをめくらないで必ず目に入るように、テキストを1枚のプリントにする工夫、さらには、発音教育における重要事項を網羅した文章をプリントし、発音習得に重点をおいた授業を進めるなど、具体的な授業の実践例と問題点が紹介された。

白井啓介：漢語中級閲読教材構想—2003年度春学期の試み—

(1)中級学習を進める条件(2)中級教材の脱構築(3)個別的条件—文教大学中国語中国文学科の設定(4)教材構想の前提(5)教材私案のねらい(6)授業指導の力点(7)評価の基軸(8)若干の反省、もしくは逡巡

文教大学中国語中国文学科における専攻学習者の中級読解教材の編さんと、その授業の進め方について紹介をされた。講読に特化できる授業配置のもと、親切すぎるテキストは排し、生の文章を読む、学習者の知的レベルを見くびらない、知的好奇心を喚起するなどの前提から読みごたえのある文章が採用されている。授業にあたっては、インターネットの導入、地図・画像・実物などの活用により、言葉だけではなく学習者の理解を促す。学習者からすれば、音読が重視され、意味を調べるだけでも苦労する上、要約の提出もあって大変な負担であるが、その苦労を乗り越えた分、進歩は確実といえる。これだけ考えぬかれ、学生に要求をしても授業が成立するのは、学習者のレベルだけでなく、授業担当者がどれだけ魅力的な授業を進められるかに大きなポイントがあると感じた。

当日、会場では実際に、《漢語中級課本》の第1課から第9課まで25ページ分のほか、7月に実施の試験問題や評価方法のサンプルも配布され、中級教材とその授業実施について、刺激に満ちた報告を聞くことができた。

教学消息 ◆前号で取り上げたが、中国国家対外漢語教学領導小組の主催する“漢語橋”(大学生国際中国語コンテスト)は“非典”(SARS)のため開催が延期されていたが、12月に上海で予選、北京で本選の運びとなった。日本予選も7月に開催、予選参加者が選ばれた◆8月に北京大学で開催予定だった“2003年中文教学發展国際研討会”は国外からの参加申し込みが20人に満たず来年に延期された。04年は“世界漢語大会”開催も予定とか。

学会誌第2号原稿募集

学会誌《中国語教育》の第2号を来春3月に開催予定の大会までに刊行の予定である。応募原稿は400字詰め原稿用紙換算で、50枚以内。内容は中国語教育、中国語学に関する研究論文、資料とし、中国語教育の現場での実践報告、調査報告や、書評等も受け付ける。投稿は委嘱原稿以外、すべて理事若干名の査読によって採否を決定する。投稿規定と執筆要領は下記を参照されたい。原稿の査読に一定の時間が必要なため、今回の投稿受付締め切りは創刊号より早め2003年12月10日(水)必着とする。事務局に郵送、または宅配便で送付すること。応募資格は、投稿時点における本会会員に限る。

《中国語教育》投稿規定

1. 投稿は委嘱原稿を除き、中国語教育学会会員の資格を有する者に限る。
2. 投稿は中国語教育・中国語学に関する論文、資料、書評その他で未公開のものとする。
3. 投稿原稿の採否は査読によって決定し、投稿者に通知する。採用の場合も、必要に応じ原稿の修正を求めることがある。(当分の間、査読は複数の理事によって行う)
4. 投稿は郵送または宅配便により、中国語教育学会事務局宛に指定の期日までに送付する。
5. 投稿はフロッピーディスクによるものとし、その内容をプリントアウトしたものを3部同封しなければならない。
6. 採否の通知その他の連絡用に住所・電話番号・電子メールアドレス等を別紙で同封する。
7. 送付されたフロッピーディスクとプリントは採否にかかわらず返却しない。
8. 原稿料は支払わない。発行後、抜刷30部を無料で進呈する。
9. 原稿の執筆にあたっては、別に定める《中国語教育》執筆要領に従うものとする。

《中国語教育》執筆要領

1. 原稿は日本語・中国語・英語のいずれかで執筆する。
 2. 原稿はタイトル、執筆者名、執筆者の所属機関、サマリー、本文の順に記す。
 3. タイトルは本文と同じ言語を使用する。日本語、中国語のタイトルには別紙にその英語訳を付す。
 4. 執筆者名にはローマ字表記を併記する。
 5. サマリーは本文と異なる言語を使用し、日本語、中国語の場合は400字以内、英語の場合は400語以内を基準とする。
 6. 本文の字数は図版等も含め、20,000字以内(400字詰め原稿用紙換算で50枚以内)とする。(原稿末尾に本文総字数を付記する。)
 7. 原稿はWindows上で動作するワープロまたはエディターを用い1ファイルとして作成する。
 8. 字詰は編集段階で変更することがあるので、変更後も行頭・行末等の位置が乱れないように作成する。ワープロソフトによる自動箇条書きや自動段落番号挿入機能は使用しないことが望ましい。また、原稿に図版が入る場合は図版の位置が字詰変更後も大幅にずれないように特に留意する。
 9. フォントの大きさは原稿を通じて統一する。原則として外字は使用しない。
 10. 例文は出典を明らかにし、作例の場合はその旨を明記する。
 11. 注・参考文献・例文出典一覧等はそれぞれ本文末に一括して付す。脚注は用いない。
 12. 参考文献は著者名(編者名)、発行年、論文名(書名)、掲載誌名および巻号数、出版社名等を明記する。
- (付記) 上記の《中国語教育》投稿規定と執筆要領は第2号原稿募集に暫定的に適用するものであり、今後さらに理事会と総会の審議により変更されることがある。